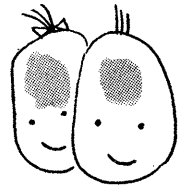


私の絵本



瀬名恵子

近頃、絵本界は花ざかりだと云われています。なる程、本屋さんの店頭には色も鮮やかな大小の絵本があふれています。これがみんな子ども達の魂の栄養になるような素晴らしいものばかりでしょうか？

百三十年くらい昔のこと、子ども好きのお医者様のハイน์リッヒ・ホフマン博士が、三つになる息子のプレゼントに絵本を買ってやろうと思って本屋へ行ったけど、気に入った本が見つからないのでノートを買って帰って来て、自分で絵本を描いたと云う有名な伝説があります。それが後に世界中の子どもに愛され、今でも健在の「もじゃもじゃペーター」の絵本で、この本の名前は、幼児教育にたずさわっていらっしゃる皆さんは多分御存知のことでしょう。

私が絵本を作るようになったのも、まったく同様の理由からです。うちの息子がまだ二歳にならない頃（もう本好きの子でしたが）ブルーナの「うさこちゃん」四冊と、東君平さ

んの「べたべたニャンコ」三冊を買ってやると、もう手頃な絵本がない。もう少し大きい子なら随分いい絵本も沢山あるのに、一、二歳の子どもの本は全然なかったのです。今でこそ「赤ちゃん絵本」は氾濫してまずけど、その頃（十年くらい前）は殆んどなかったのです。あるのは店頭の丸い差込みに沢山立ててあるワンワンニャンニャン乗物絵本——当時百円くらいのも——安かろう悪かろうと云う本で、とても買う気にならない。そこでホフマン博士じゃないけれど自分で作る事にしました。と云うのも私の商売が童画家で、子どもに絵を描いてやるのはなんでもなかったのです。ただ仕事の時は、たいてい作家の書いた文に絵をつけるだけで、幼稚園雑誌の見開きページとか、単行本の装丁やさし絵とか、スライド、紙芝居、それも文は自分では書いた事がありませんでした。でも詩や童話は好きで日本童話会で勉強したり、同人雑誌に詩を出したり。発表した事はなくても、自作の童話もいくつ

かありました。

それで自分で絵と文と両方かくのは初めてですが、考えてみりゃあ別にどこかの出版社から出すわけではない。自分の子どもにみせるんだから思うままに作ればいいんだと、ごく気楽な気持ちでこしらえたのが『にんじん』です。

なぜ『にんじん』の本を作る気になったかと云いますと、

私は小さい時人参が大嫌いだったのです。その上主人も子どもの時人参が嫌いだった——この分では息子も人参が嫌いになるんじゃないかしら？ 小さい時、やたらに好き嫌いが多くって、大変ヤセッポチだった私は（親に似ず）丸々と肥って大きい息子に偏食の癖をつけたくなかったです。人参が好きになってくれるといいなあ。だけど「人参食べたらごほうびあげましょう」では如何にも人参がまずいと云う印象を与えてしまう。逆に「人参ってとってもおいしいのよ。お肉たべたらごほうびに人参上げましょう」って云ったら人参がおいしそうに聞こえるんじゃないかしら？ ごく小さくて人参に偏見を持たない内に、人参はおいしいんだと云う暗示を与えちゃおう、と云うわけで、子どもの仲良しの兎や他の動物たちを登場させて、人参はおいしいおいしいと繰返させたの

です。最後の頁に出て来る丸顔の男の子は、その頃の息子の肖像画です。

さて息子は自分が登場し、動物たちが沢山出て来る絵本が気に入って、絵本が手あかだらけになったかわりに、親の望み通り人参の好きな子に育ちました。今ではもう五年生、もうすぐ私を追いぬきそうな位に大きくなっちゃいました。その内、上を向いて叱言を云うようになるでしょう。

区立の保育園に生後半年から申込んであって、二つになってもまだ入れない状態にほとほと困り、子どもをあやしなから仕事を続ける一番苦しい時代でした。だがこの本は仕事じゃなくて、子どもを遊ばせながら、あり合せのポスターを切って裏返して綴じたのに、手近な色紙をベタベタ貼って、短時間で作り上げたごく気楽なものでした。

我が子一人の為の特製一部限定版のはずだったこの絵本が、ふとした事から福音館の編集の人の目にとまり、すすめられて次々絵本を作る事になったのは、それから三年くらいあと、息子が五つ、次の娘が二つの頃でした。だからその後の絵本は、娘の出でくるのが多いです。

『もじゃもじゃ』私の小さい時もそうでしたが、子どもたちは床屋さんが大嫌いで、暴れてなかなか刈らせないので、

何時も苦勞の種でした。それでなんとか大人しくさせようと
思つて作つた本です。

『ねないこ だれだ』 娘のルルちゃん（本名薫なので普段
ルルちゃんと呼んでいます）は寢床へ入れても、すぐ出て来
てしまつて、夜何時まででも遊びたがり、これにも随分困ら
せられました。それでこの本を作つたのですが、おぼけなん
かちつとも怖がらない今の子は大喜びで「あたし、おぼけに
なつてとんでゆくの」と得意になつて居ました。おぼけの出
て来る本は保育園でとても喜ばれ、赤ちゃん組でもこの本が
特に人気があつたようです。

『いやだいやだ』 うちの娘は反抗精神が盛んで、なんでも
かんでも抵抗するので、これは親の方の抵抗の書です。親だ
つて生きていますから、頭へ来る事もあります。

『あーんあーん』 保育園の四月は涙の大合唱です。幼稚園で
も多少は雨の降る子もいるでしょうが、保育園の新生活はた
いてい一、二歳ですから、その泣き方はすごいです。大部分
の子どもは一か月以内に馴れるようで今までの最高記録は半
年。うちの息子はかなりの重症で三か月くらいかかりまし
た。娘の方は一週間で馴れましたから、この主人公は娘より
娘の友だちのヒデちゃんと云う可愛い坊やです。この本を

最初に作つた時は最後の頁はバケツの中に魚が居る所でおし
まいだったのですが、それではあんまり可哀そうだと云う意
見が出て、子どもの姿に戻したのです。

『ふうせんねこ』 これは息子の方です。娘より大人しい子
ですが、何かと云うとブーッとふくれるので作つた本。それ
と屋根の上で、夜鳴き騒いで居た野良猫たち。これもヒント
の一つでした。

『ルルちゃんのくつした』 保育園のお昼寝の時間に、ル
ルが靴下を片方なくして来たのです。その晩五分間くらいでふ
わーっと出来たのがこの話。

大体机にむかつて何とか作品をひねり出そうなんて思つた
つてちつとも出来やしないんで、何か他の事をする時や、
子どもと喋つてる時にふつと浮んで来るもんです。『いやだ
いやだ』は保育園に子どもたちを送つて来た帰りのバスの中
で思いついて、ゆれるバスの中でメモをしておいたのがもと
です。もともと絵描きですから、文が浮ぶと同時に絵柄も浮
んで来るのです。だから次の案が何時出来るかさっぱりわか
らない。私は出版社の注文に合わせて絵本を作ると云う事は
せず、自分の子どもの為にどどん作つてしまつて、それを
後から出版しようとする会社があつたら出していただく云

う風にしています。話が脱線しましたが、もとへ戻って続けますと、

『きれいなほこ』この一冊だけは珍しくうちの子は全然出て来ません。保育園の先生に「お友だちを噛む癖のある子がいて困るのよ。何かそう云った絵本出来ないかしら？」と相談され、又この前の「ねないこ だれだ」でおぼけが好きになり、もっとおぼけの本を作ってとせがんで居た大勢の子どもたちの為に作った本です。

こうやって振り返ってみると、私の絵本の世界はうちの子たちとその友だちの、いわば私小説みたいなものばかりです。そして第一集の『いやだいやだ』の方がサンケイ児童出版文化賞をいただいて、世間の方の目にふれる機会が多くなつた事から風当りも強くなり、しつけ絵本なんて今つけしからん、子どもにこんな「日常価値観に帰属する——閉ざされた世界の為に絵本を奉仕させる」「恐怖によつて子供を眠らせよう」と云う発想でひどく残酷な感じ」なんて云う評論家まで現われて、私の目を白黒させました。私はこの評論家先生のような難しい事はわかりませんが、私の知っている範囲の子

どもたちはおぼけが大好きで、私におぼけの絵本をもっと作ってくれとせがむ子ばかりです。それに「しつけ」ってそんなに悪いものでしょうか？ 親だったら、保育者だったら、子どもをしつけようと思うのは当たり前だと思います。子どもが火の中に手を突っこもうとしたら叱るし、お菓子ばかり食べて御飯を食べない子を放っとくわけには行かないでしょう？ 終戦までの昔のしつけ、ゆがめられた封建時代の遺物のしつけには私も反発しますが、現代だってしつけは大事なものです。ただこうしなさい、ああしなさいとガミガミ叱るよりも、それを絵本と云う形で与えただけで、しつけを絵本に持込んだと云えば気に入らないかもしれませんが、叱言のかわりに絵本を与えるのは——少くとも子供達は喜んで受入れてくれています。露骨にしつけを押しつけければ反発しますが、それをどう料理するかは作者次第、あの当時にさえ学者たちにとや角云われたしつけ絵本の元祖「もじゃもじゃペーター」を、現在保育園の庭で子どもたちに読んでやると、どんなに喜んで何度もせがんだか——と云う事から考えてみると、「しつけ恐怖症」にかかっているのは少くとも子どもたちではないようです。

(絵本作家)